

【隅田川】 すみだがは

悲劇を描いた数多い文芸、芸能の中で謡曲『角(隅)田川』ほどの名作はそうあるものではないでしょう。

観世元雅作。狂女物。梅若伝説を本にしています。人商人にさらわれた我が子梅若丸を捜しに母は京から東国までやってきます。隅田川を渡る船中で船頭から人商人に捨てられ病死した憐れな子話を聞くと、母はその子が梅若丸と悟りその子の墓を訪れます。夜、人々の念仏に梅若丸の姿が現われ暁とともに消えていくという話です。

この話もこの掲示板でしばしば採り上げてきた親子再会譚のひとつです。親子再会譚は親と思春期の子との普遍的な葛藤が深層にあるというのが私の拙い解釈です。(折々の銘・桜川・三井寺・弱法師参照)

親と思春期の子は何らかの事情により互いの心が向き合わなくなることがあります。未だ自立しきれない子が親の愛から見離される場合、過保護な親の手から子が抜け出そうとする場合、子が親に不信感を覚える場合など原因はさまざまでしょう。こうした状況の中で心の安定を失った子の心は不安の闇を彷徨い、憤りや絶望感がこみ上げてくるのです。

こうした親子の修羅をこれら謡曲は表現しているのではないのでしょうか。ほとんどの曲では再会を果たし親子は連れ立って帰郷します。しかし『角田川』だけは子は人商人ですら捨ててしまうほどの病の末に息絶え、亡霊となって母親と再会するのです。物語の深層は、ついに心が向き合うことのできなかつた親子を描いていると私は思います。現代の墨田川は東京都の北区、足立区、荒川区、墨田区を流れ佃島を経て東京湾へ注ぎます。川岸は工場地帯、商業地帯、住宅地、観光地と華やかです。しかし、江戸以前の隅田川は東国の田舎のさびしい川として文学に登場しています。

・名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

『伊勢物語』九では東国へ下った男(在原業平)一行が隅田川の渡しに都鳥という鳥の名を聞いて都に残してきた人を思い出し涙した所として有名ですね。この東下りの話は八橋、蔦の細道、富士、隅田川と続き各地が大和絵の画題や着物・蒔絵・絵付け茶碗などの意匠に採り上げられてきました。

江戸時代になると隅田川のイメージは一変します。川沿はおおいに繁栄をみせ、春の桜、夏の花火、冬の雪景色が親しまれてきた。河岸での夕涼み、舟遊びを楽しむ人が増え享保十八年より川開きが始まります。現在では川開きを五月二十八日に定め、花火を打上げています。明治に入って滝廉太郎作曲、武島羽衣作詞『花』により隅田川のイメージは更に明るいものとなりました。現在、川沿いの墨田公園にこの曲の碑が見られます。

「春のうららの隅田川♪上り下りの舟人が♪柁の雫も花と散る♪眺めを何にたとふべき♪」いい曲ですよ。私も小学生時代二部合唱で歌った思い出があります。

下のパートを歌えば上のパートに釣られてしまい、上のパートを歌えば…。

永井荷風の小説に『すみだ川』があります。晩夏から翌年の初夏までの隅田川の季節の推移を背景に、役者志望の若者長吉と幼馴染の芸者お糸がくりひろげる恋物語です。郷土文学的作品とい

ってよいのでしょうか。

茶の湯との関わりを見てみましょう。

文政の頃、骨董商 佐原鞠塙[サハラ キクウ]は百花園という植物園を造園しました。谷文晁・酒井抱一・太田南畝・村田晴海・大窪詩仏・加藤千蔭などの文人墨客が集ったそうです。

現在の墨田区東向島にあり、向島百花園と称され隅田川沿いの名所のひとつに数えられます。かつて、百花園には窯が築かれ、隅田川の洲浜の土で楽焼風の軟陶を生産しました。「隅田川焼」です。都鳥を象った「都鳥香合」などが有名ですね。

向島対岸の今戸における白井半七の作陶(今戸焼)にも都鳥香合があります。ちなみに、都鳥はゆりかもめのことです。

染付型物香合、番付西四段十四位に「隅田川香合」があります。四方の形で蓋の対角線にはじきが付き、蓋に柳と屋形舟が描かれています。本来、隅田川を描いた染付ではないのですが屋形船から連想しての名でしょう。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~